



小さな運動の積み重ねを大事に

あらためて「地方から国の政治を変える」

2003年5月発行のニュースがある。当時は「事務局ニュース」がタイトルであった。2003年と言えば小泉第二次内閣の時である。その年の11月9日に第42回衆議院選挙があり、土井たか子党首が、34年間守ってきた兵庫県地方区の戦いで自民党候補に敗れた。比例代表候補で議席は守れたものの、全国の議席は3分の1の6議席となり、存亡の危機に立たされた年であった。

その時の福島OB・Gのニュースの見出しは「地方から政治を変えるために」であった。そのニュースを再度紹介したいと思う。

「次のような『語り』がある。昔、ある集落の広場に長老を中心に全員が集まった。その年の祭りをどうするか、今年の作物の植え付け分量を話し合う場であった。一人一人の発言が始まり、つかみかからんばかりの激しい討論となった。長老は全員が納得をするまで討論を続けさせた。そして夜も更け、発言が途絶えた頃合いを確かめ長老は結論を出した。人々は納得顔で家路についたという。これこそ直接民主主義そのものである。『地方から政治を変えよう』と冒頭に述べられている。つまり、身近な私たちの地域の行政の変

革から始めたいということである。

一週間に一回、朝出した生活廃棄物が午後になつても回収されない。そのうち「カラス」が寄つてくる。子どもの教育問題はどうか。ある地区では、それなりの環境と教育設備が整っているが、地区が異なれば、過疎と言っただけで教育設備も不十分である。このような生活に密着した課題の改善を行政に求める。そして自分たちが求めた要望が実現し、改善されたときに『やつて良かった』となり、次も取り組もうとなる。その意識が『市民参加の政治』をつくる。辛抱つよい集落の集会で

の長老は現在の地方自治体の首長だろう。各集落の代表は地方議員である。その代表である首長と地方議員を私たち市民がつくり、選ぶところに私たちの国を変える運動がある」

(ニュースNo.7号・2003年5月)

社民党の衰退に

歯止めをかけられなかった20年間

そこで再度社民党の合流問題を取り上げたい。この20年間、残念だが「社民党の衰退」は止まらなかった。この衰退に歯止めをかける運動として、社民党との支持、協力関係を持つてきた労働組合の退職者、それに「社民党」に期待をする生活者の皆さんにより「社民党を応援する高齢者組織」が結成をされた。それが「社民党がんばれOB・Gの会」である。会員の中には黨員もいるが、

多くは「市民・年金生活者」である。よつて党黨員に期待をすること、大であったことも事実である。そして福島県的には、月一回の「ニュースの発行・配布」という運動を通じた「社民党に期待し、連帯をする」ことを課題としてきた。

一人一人の貴重な継続が24年余を支える

県内でのニュースの配布は850余、それを26名の地域担当者の努力によつて継続されてきた。その一人である市会議員は50余のニュースを後援会の中心の方への自宅配布を続けた。そして皆さんは議員の訪れを待ち、そこでの会話が議員の地域活動の源泉になったということに語りだされた。また、急遽入院をされた方がいる。そこで配布の協力を仲間へ求め、さらに奥さまが自動車を走らせたという報告もあった。また、受け取つたニュースを増す刷りして県外の友人に送る、その友人がさらに増す刷りをして現地の仲間へ配布をしているという報告もある。コロナ禍で大変な時に、毎月届け下さる運営委員との会話に「がんばる気になります」というお手紙も寄せられた。

その姿勢は、大衆を指導し指揮する「大きな存在」ではないかも知れない。しかし、それら一つ一つの積み重ねが地域における連帯を生み、そしてその努力が「社民党への期待につながってきた」とするならば、何にも代えられない素晴らしい、そして貴重な財産であると言えないだろうか。

だからこそ、この運動の継続ができないかとの想いを強くしている。

【視点】

誰でもが直面する老後の介護

市町村が介護認定する場合、その審査で欠かせないのが主治医の意見書である。その医学的な意見書は、審査の判定に用いられると同時に、患者の症状の安定性、心身の状態、生活機能など医療、介護のサービスに関する情報となる。そのようなこともあって、主治医は患者が退院するにあたってはその家族と面談し、退院後のケアの主たる家族は誰かと言うことなどが話し合われる。しかし、その場に集まった家族同士が主治医を前にして、その責任逃れをする光景を目にするのが多々あると主治医の報告がある。各々が家族を持ち、将来の生活設計を持っている。そのことを守り、覆されることへの悩みと抵抗が悲しい事例を生み出すということであろう。

また、埼玉県が全国で初めて全高校の2年生への実態調査を行った。回答者の約25人に1人にあたる1969人が、家族を介護する「ヤングケアラー」になっていることが報告されている。

「父を支えるのは祖母と自分だけ、今後就職などどう行動すべきか全く分かりません」と。そしてやがてはその祖母の介護も必要になる。県の調査に応じたある生徒は不安を隠さなかったと述べていた。

(毎日新聞11月25日)

菅首相は「まず自立」を強調し、さらに全世代型社会保障と言います。しかし17歳の高校生が学業と将来、そして健康を犠牲にしてまでの親たちの介護という事実には、政府はどのような回

答を持っているのだろうか。

さらに、深刻化するコロナ禍にあっても、政府は「経済は大事、GOTOキャンペーンはやめられない」との主張をつらいつけている。しかし、政府が委嘱をした専門家チームも「人が動けば感染を増やす動機になり、入院、重症患者の増加と『医療崩壊の危険』を進言している」。ようやくにして政府は時限的にキャンペーンの中止を決定したが、それでも来年6月まで継続をするという。その政府の意図は何か。そこには「オリンピックの開催を強行する『賭け』への国民の参加を企む政府の姿のあること」を見抜くがどうだろうか。恐ろしいことである。



各地域行政のホームページから

あらゆる情報を大事にする

「濃厚接触者」とは、「患者(確定例)」の感染可能期間に接触した者のうち、次の範囲に該当する者である。

■患者(確定例)と同居あるいは長時間の接触(車内、航空機内等を含む)があった者。

■適切な感染防護無しに患者(確定例)を診察、看護若しくは介護していた者。

■患者(確定例)の気道分泌液もしくは体液等の汚染物質に直接触れた可能性が高い者。

■その他：手で触れること又は対面で会話することが可能な距離(目安として1メートル)で、必要な感染予防策なしで、「患者(確定例)」と15分以上の接触があった者。

(国立感染症研究所による定義から)

まずこのことを抑えて、コロナ感染の福島県内の状況を考えてみる。地方紙は毎日の朝刊で詳しく報じている。同時に福島県のホームページでも「福島県内の新型コロナウイルス発生状況一覧」を掲示している。プライバシーを守ることは勿論であるが、その「発生一覧」から、感染者との接触によって次の接触者へ、そして家庭に、あるいは職場へ、そして医療機関や介護施設への感染経路をたどることが読み取ることができる。このことは感染を防ぎ、そして拡大させないための指標となり、あらためて「発生状況一覧」から考える。

福島県の感染拡大の大きな波は次の9月から始まる。◆9月1日から9月29日の間の陽性者は91名、内、濃厚接触、または接触による感染は41件・その接触感染率は45%であった。以下◆10月1日から30日・134名・66件・49%◆11月1日から30日・112名・69件・61%◆12月1日から12日103名・81件・78%である。

この発生状況から飲食店、学校、医療機関、家庭内のクラスターも読み取ることができる。

10月、郡山駅前飲食店のクラスターに際し「厚労省対策チーム」が来郡をした。そのチームは「調査から疫学情報を集約し、解析・文責」を行うことが重要と進言している。マスクの着用、三蜜の回避なども重要だが、同時に毎日の情報を重視し、その情報から疫学予防を読み取る知恵が必要であると考える。この機会にネットの活用と、そこから得た知識、情報を仲間にも広めることを提起したい。町のホームページの参照も可。

横文字使用の罪を問う!!

国民の多くが「GO・トトラベル」事業の自粛を求めており、年末の帰省をどうすべきかと多くの人が悩みました。「コロナ禍において政府は、国民を動かそうとしてする耳慣れない言葉を多用しました。わざわざなじみのない外来語を使い、翻訳語にない意味をつくりだす例が目立ちました。

「その代表例の一つが『GO・トトラベル』と言えます。これを直訳すると『旅行促進・推進事業』という意味です。いくらなんでもそんなこと言うと、このような時期にと多くの人から『何を!』という反論も出るでしょう。しかし、横文字を使うことで、なんとなくあまいに緩和する効果があったと思います」

★★★★★★★★★★★★

【ニュースを読んで】



■コロナで明けコロナで終わる様な1年だった気がします政権の交代等が何か置き去りになった気がします。本当は重要な年であるはずなのにすがゴーストトラベル、そしてイトで締め括りですかね、社民党も福島党首1名の様子今が踏ん張り所ですね。その様な中、今月11日の「読売新聞」の「気流欄」に思わぬ方の投稿がありました。二本松在住の先輩で齢91才の先輩が「福島

意気に感じ入り十数年ぶりに声を聴きたくて電話をしました。元気な声でこれからも発信を続けるとの事でした。先輩を見習って頑張ります。コロナ&インフルエンザ乗り越えましょう。

■社民党の件は複雑な思いです。福島瑞穂さんの思いを想像しております。先日「監獄人権センター」のオンラインシンポジウムに参加しましたが、福島さんの夫である海渡双葉弁護士も、お二人のお嬢さんである海渡双葉弁護士も大変素晴らしい社会活動をされています。信念と志のある人の声をもっと社会全体に影響を与えるように社会を変革したいものです。鬼のような目をした菅が首相であることが耐えられませんか。地道な活動を続けます。

■社民党郡山市議団で相談し結束して、今後も頑張っていきたいと思っております。これからもどうぞ宜しくお願い致します。

■福島県連合は分裂議案に反対から賛成に代わり、今度は大会決定に反して合流で議論する方向です。立憲は日の丸を掲げた党大会で、日米基軸 ハードル高く私は行けません。党に残り、日常活動に全力を挙げるつもりです。

■死亡後のワンストップサービスについては私の所属する創世会の令和3年度予算要求に入れておきました。福祉団体からの要請でした。いわき市は、私の議会での質問もあり市営住宅入居時も保証人制度から緊急連絡員制度に切り替えられました。また、私も会員となっている地域福祉ネットワークでは、身寄りのいない単身者に対し

て市営住宅や民間アパートの入居時の看取りまで含めたサービスを安い会費で提供しています。

■コロナ禍のもので、多くの働く人々が職を失い、十分に食糧を摂ることのできない子どもたちが増えています。このような人々の窮状を前に、菅政権は来年度から、高校卒業生が2〜3年の期限で任官する「任期制自衛官」にたいして、「即応予備自衛官」に登録することを条件に学費を全額補助しようとしています。「即応予備自衛官」は、有事の際、第一線で任務に着かなければなりません。来年度から新たに導入されるこの予備自衛官制度は、間違いなく経済的徴兵制といつてよいでしょう。戦争法制定後丸5年、「戦争する国」づくりはここまで進められてしまったのです。

また、菅政権は、戦争法制定などに反対した学者の日本学術会議会員任命を拒否し、軍産学共同研究推進に警鐘を鳴らし続けてきた日本学術会議の改組を図る一方で、防衛費を天井知らずに増大させ、海上イージスアショアの導入、サイバー部隊の新設、小型衛星群などを導入しようとしています。いまや、菅政権は装備の面でも隊員の実戦能力の面でも、実際に「敵基地攻撃能力」を保有しようとしているのです

■今年の正月は、武漢の新型コロナウイルスも対岸の火事程度でしたが、その後の展開はすさまじいものです。全世界が揺れています。目に見えないウイルスが、猛威を振るう社会の弱点をあぶり出しています。大阪の感染増加は、GO・トトラベルの影響や自粛の緩和もありますが、都構想の住民

投票が輪をかけたのでしようね。大体、僅差で決めることではないものです。尼崎も大阪の影響で増えています。いろいろな行事が自粛せざるを得ません。

■ニユースの中で、過去の社民党の選挙の歴史を振り返る記事が、とてもわかりやすく、説得力があつたように思います。今後を見通し、歩き方を決めるには、まず来し方を振り返り、総括をする必要があります。社民党に欠けていたのは、その総括だつたように思います。なぜ票を失つたのか、なぜ掲げる理想や理念が、人々の心に響かなくなったのか、そこをとことん突き詰める議論が欠かされたように思います。その点、今回の「ニユース」の視点は、公正で率直な見方だと感じます。そのうえで、「地方自治」に活動の足場を置くという考えに共感しました。どんな社会活動、政治活動であつても、出発点は身近な生活の場だと思えます。

■急激なグローバル化が始まった十数年ほど前、「グローバル」という言葉がはやつたことがあります。グローバルに考え、ローカルに行動せよ、という標語でした。その時は「なるほど」と思いましたが、今から考えると、そこにはグローバル化を自明の前提として疑わない、あるいはそれを是とする考えがあつたと思います。コロナ禍で、グローバル化の流れがストップしたいま、「グローバル」という考え方のもろさ、危うさを噛みしめています。

これから先は、身近にある資産、人も資源も歴史遺産も含め、周りにあるものをいかに発見し、

どのように本来の豊かさを活かしていくのか、「地域の循環」を考えていくべき時代になるのではないのでしょうか。もちろん、ITを使う時の流れは変わらないと思いますし、相互依存の動きがやむこともないでしょう。でも、軸足を足元に置き、限られた資源で必要な人に、必要なモノやサービスを届け、支え合うことによつてしか、この高齢化や、人口減少が続く社会をもちこたえる方法はなないように思います。そのような時こそ、それぞれの地域に応じた行政を求める地方自治の真価が問われるように思うのです。その意味で、今回「ニユース」で示している方向は正しいと思えました。「お悔みワンストップ」など、まさに好例だと感じます。全国的な展開ができなくなつても、初心を貫く場はありますし、それぞれの場で、活動を続けることが求められているのだと、強く思います。札幌もコロナの感染拡大に歯止めがからず、病院の負担が重くなつてきました。寒さに向かう日々、どうなるのかと心配な日々が続いています。

■党の臨時大会・合流問題・コロナウイルス感染症等・・・、相変わらず落ち着かない毎日です。しかし、人間世界のどんなことも関係なく、毎日が過ぎ、季節が過ぎていきます。日々過ぎていく毎日の中で、幸せや楽しみを見つけたり、気が付くことを忘れないように過ごしていきたいものです。

■「ニユースNo.164」受け取りました。郡山のコロナ、一時の爆発的な発症も収まったようです。良かったですし、何かホットしています。党の合流問

題、臨時全国大会(社会新報や党の報告を見る限り)は何だったのでしょうか。あの社会党以来の政党なのか。よくぞ政権をとるのだの、強大な国家権力を倒すだなど。50余年の党員として恥ずかしい限りです。

■おつしやる通り「言葉」は通じなければなりませんね。そして言葉の力を信じたいといつも考えていますが、前政権にも増して言葉を大切にしない、議論を交わす信頼感の土台さえも突き崩す強権的な菅政権には怒りをおぼえます。昨日、大阪地裁が大飯原発の設置許可を取り消したというニユースがありました。地震動の基準を決めるにあつてバラツキと安全係数(余裕度)を考慮していないという、技術的には当たり前のことを指摘しています。この判決も、地道に活動を継続してきた原告、関係者のみなさんの努力の結果だと思えます。そしてそれは降矢さんの、「先の見通しがあまりなくとも継続をするという決意」にも相通するものだと感じました。

■OB・Gニユース。編集と手配りのご苦労を思いながら読んでいます。今一番問題だと思うのは森友・加計・さくらもさることながら、検事総長定年延長でした。司法への権力の介入です。いつも、なんとかかと思いつつもどかしく思います。同じ想いを持つ人の結集こそが急務です。もう少し頑張らしましょう。

コロナに負けるな

経験と知恵で、コロナを

うつすな、うつさせるな

